（続紙 1 ）

| 京都大学 | 博士（経営科学） | 氏名 | 安松 健 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 創造的思考の脱中心的・現働的理論展開<br>渾然一体としての創造理論 | | |

（論文内容の要旨）

デザイン思考の創造社会発展への多大なる貢献は，従来デザインの創造性はデザイナーが生み出すものとして，デザイナーという「人」に帰属すると捉えられてきたことに対して，デザイン「思考」としてそのプロセス原理に着目することで，デザインを属人的な在り方から解放し，その創造的活動を非デザイナーに拡げ，エスノグラフィやワークショップやプロトタイピングなどユーザーやモノや状況との相互関係で生み出す手法を取り入れて共創的な方向性を示したことである．しかしその一方で，デザイン思考は，デザインという創造活動においてデザイナーが持つ能力（統合思考）を中心的要素としている．このことは，ユーザーや企業やテクノロジーやモノなどとデザイナーを切り離し（主客分離），そして，デザイナーの思考と行動を別々とみなし（心身分離），Kimbellの指摘の通り主客・心身二元論で捉えることを意味している．つまり，デザイン思考はユーザー・人間中心デザインを標榜しているが，それはあくまでデザイナー（主体）が持つ能力があり，相手側として企業や技術などでなくユーザーを重視（客体の中心をユーザーに）するということであり，デザイナーの能力を中心的要素としていることに従来と変わりはない．そして，この理論的視座では，デザイナーが生み出すアイデアや価値を客体として静的に，そして絶対的に捉えることになってしまう．このようにデザイン思考は，デザイナーのデザイン能力を手渡し誰にでも発揮できると言っても，結局はデザイン活動の中心的存在としてデザイン能力を発揮する人の超越的な立場を維持してしまっているという理論的問題を抱えている．

そして，この理論的問題は，エスノグラフィやワークショップやプロトタイピング手法を導入したとしても共創には至らず，創造的思考手法を実践しても創造的成果が生まれない結果につながってしまっている．以上のように，デザイン思考には，デザインや創造性を主客・心身二元論で捉えデザイナーの能力を中心的要素とする理論的問題があり，デザイナーの属人性を解放し共創的に実践するという本分に支障をきたしていると考えられる．

この問題に対しては，主客・心身二元論でもなく，静的な構造も捉えず，中心的要素を置かない脱中心的で動的な視座が求められるが，物事を渾然一体とする理論的視座としては，KJ法理論とアジャンスマンがある．

KJ法理論は，創造的思考で最も活用される実践手法と一体となっている脱中心的な理論である．その理論的視座は，人間中心ではなく，己を空しくして，渾沌をして語らしめる，個即全，全即個などと説明され，人間以外に主体性はないとする独断や自他や主客を分離する二元論から自由になるべきと説くもので，自我というものはなく根底にあるものは渾沌であって創造性はその渾沌から生じるとするものである．このようにKJ法理論は，中心的要素となる概念を置かず相対的に物事を捉える脱中心的で動的な理論である．

さらに，脱中心性と動的性の議論を深めるために，KJ法に影響を与えたベルクソンを発展させたドゥルーズによって提唱されたアジャンスマンについて確認すると，この概念は脱中心的視座を踏襲しつつ，さらに現働的な視座を明確にする理論である．アジャンスマンは「たえず変化しつつ，たえずさまざまの個体や集団によって組み直され再構成されながら，かたちづくられている」ものであり，その領土性は「脱領土化の線からなり，この線に横断され，この線に巻きこまれる（…）それはしかも必然的にこれらの脱領土化の線によって拡張される」，そして創造については，脱領土化する逃走線という線で説明し，それを創造的な逃走線である≪と≫…≪と≫…≪と≫

…で表現される．このように，アジャンスマンとは，欲望も創造も諸事物も，何かと何かの間で起こる線として生成を続ける活動と捉える脱中心的で現働的な概念である．

そこで本研究は，デザイン思考に内在する理論的問題に対して，KJ法理論とアジャンスマンの脱中心的で現働的な理論的視座が解決策となることを示した．研究方法としては，創造的実践例としてKJ法図解による2ケースを取り上げ，その創造性についてKJ法理論とアジャンスマンを用いて分析した．その結果，創造的統合に至らない整理・分類の誤用との違いを浮き上がらせ，蔓延するその誤用を回避する示唆が得られることと，脱中心的で現働的な理論視座的がデザイン思考に内在する問題を解決することを例証した．また，その脱中心的で現働的な理論的視座を実践に落とし込む手法としては，ビジネス現場に求められる効率性を考慮し，KJ法を一部改善した手法を提唱した．そして，その手法を用いたワークショップ実践を定量・定性分析に検証し，提唱した手法による創造的統合の実現と手法実施における成功要因を示し，創造的思考の実践に貢献する示唆を提示した．

（続紙 2 ）

（論文審査の結果の要旨）

本博士論文は、近年実践において浸透してきたデザイン思考の理論的限界を特定し、新しい理論的視座のもとでその限界を乗り越えることを目指す。デザイン思考は、デザイン能力をデザイナーに閉じたものとしてではなく、誰でも実践できる「思考」として再構成した。しかし、デザイナーという主体が、デザインされる客体から距離を取り、特定の思考法でデザインするという、主客分離の枠組みを保持したままであった。結果的に、デザイナーという主体を特権化しないものの、デザイン思考を身に付けた個人が超越的な立場からデザインするという枠組みが残されている。

この主客分離の前提は、デザイン思考が用いる方法とも矛盾する考え方であると言える。例えば、デザイン思考はエスノグラフィを用いるが、エスノグラフィは文化が客体として存在すると捉えるのではなく、文化を記述する主体も記述に巻き込まれる再帰性が前提とされている(J. Clifford)。また、デザイン思考で実践されるワークショップは、アイデアが個人の頭の中にあるのではなく、実践に関わる共同体に埋め込まれたものであることを前提とするものである(J. Lave & E. Wenger)。あるいは状況との会話というデザインの定式化(D. Schön)も、デザインを主体が頭の中で構成するものではなく、状況との相互作用として捉えるものである。これらの方法論が実践において誤解されて用いられているのは、デザイン思考があくまでも主客分離の前提を保持してきたことに原因があると考えられる。

本博士論文は、この問題を乗り越えるため、デザイン思考や創造性手法で用いられることの多い、KJ法に立ち返ることを提案している。KJ法はカードを用いて情報を整理する方法と考えられているが、同時に西田哲学やH. Bergsonの哲学をもとにした理論的背景を伴っている。その理論的視座は、人間主体が思考するのではなく、己を空しくして、渾沌をして語らしめるなどと説明される。さらに、超越的な自我が秩序をもたらすのではなく、創造性は渾沌から生じると考える。つまり、KJ法は、主客分離を乗り越える明確な意図を持っている。

しかしながら、KJ法の理論的基礎は十分に明確にはされていない。創始者の川喜田二郎氏から直接学んだ人々は実践することができたとしても、多くの人にとっては十分に理解し自ら実践できるようには説明されていない。これは、Bergson自身の哲学についても同様であり、その後の哲学において忘れ去られてきたとも言える。1960年代後半に入って、G. DeleuzeがBergsonの考え方を取り入れ発展させ、Bergsonの哲学の意味がようやく理解され、利用されることになった。本博士論文では、このDeleuzeの理論をふまえて、KJ法を補完し、デザイン思考を捉え直すことを提案するものである。

特に、DeleuzeがF. Guattariと共同で練り上げたアジャンスマン(agencement)概念に着目する。アジャンスマンは、Bergsonの持続(durée)概念を発展させたものである。Bergsonによる持続は、主観的な体験から、客観的な自然に至るまでの幅広い存在に関して、個々の部分が独立しているのではなく常に相互作用しながら存在している全体性を示す概念である。アジャンスマンは、超越的な中心を排除しつつ、様々な異質なものごとがつながり、閉じられることのない新しい全体性を表現するものである。具体的には、異質なもの同士が互いを前提とするような関係性に入り、それにより新しい配置が生み出される。これらの部分は分割できないし、分割すると本性を変える。これはKJ法が様々なカードに書かれた断片である対象(部分対象)を結びつけ、新しい状態を表現する動きを説明するために有効な概念であると言える。

しかしながら、アジャンスマンはBergsonの持続概念の発展として、より動的な性格を持っていることを忘れてはならない。アジャンスマンは、単に異質なものが配置されるというだけではなく、その配置がたえず変化し組み直される動きを内包した概念である。つまり、潜在的なもの(virtuel)が、分化、個別化して、具体的な状況へと現働化する(s'actualiser)動きである。アジャンスマンにおいて、何らかの固定化していく、つまり領土化していく動きは、常に解体する脱領土化(déterritorialisation)の動きを伴うと考えられる。この考え方によって、KJ法の説く、「渾沌をして語らしめる」や「相対的な志の近さによって」統合するという思想を、より明確に説明することができる。

本博士論文は、この考え方を理論的に整理した上で、久留米絣ブランドの戦略立案、体験型宿泊施設の新規サービスの開発の2つのケースを用いて例証した。まず、両ケースが創造的実践であることを、KJ法に反する想定例と比較することで示し、次に、その創造的統合及び実践をアジャンスマン視座で分析し、脱中心性と現働性を明らかにした。また、KJ法とアジャンスマンによる脱中心的で現働的な視座が、次なる活動に繋がり、実践の持続的連鎖を生み出していることを例示した。

このように、本博士論文はデザイン思考の既存の考え方の理論的問題を指摘し、その原因としての主客分離の前提をあぶり出し、この原因に対応するためのBergson、Deleuzeの理論を利用することで、問題を乗り越えることを提案する一貫性のある筋書を構築している点を評価できる。一方で、本博士論文の課題としては、まずここで議論している現働的実践にどのような境界条件があるのかが必ずしも明確ではないことである。確かに動的なアジャンスマンは理解できるものの、単なる渾沌ではなく、いくらかの構造を持っている。そうすると、実際には現働性に様々な幅が考えられるはずであり、どういう条件のもとにどういう現働性が見られるのかを議論する余地がある。

また、本研究では実践への批判が目立つ一方で、実践への有用性は明示的には議論されていない。この点については、第3、4章にて次なる活動に繋がる活動の連鎖として示しており、第5章にて成功の定義についてBergsonの不可分の連続の活動を用い確認しているが、この定義を実践においてどう活用するのかについてもより深く理論的に検討することが望ましい。

最後に、KJ法のアウトプットである戦略やサービス構想がアジャンスマンとして生み出されることは記述されているが、そのアウトプットの性質が他の手法を用いて生み出したものとどのように異なるのかが明確ではない。たとえば、現働的なKJ法のアウトプットは、それ自体がさらに現働化されるとすると、どこにどのような潜在性が実在するのかは議論の余地がある。そして、このアウトプットが主体から切り離された対象ではないとすると、アウトプットを生み出した人がそこにどのように関わるのかも明確ではない。これらを明確に議論することで、本博士論文の貢献をより強調することができると考えられる。

ただし、これらの諸問題は、博士論文としての評価を著しく低下させるものではない。以上を検討し、本論文は博士（経営科学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2021年2月15日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。